

# Vol.16 No.1 '93

1993年11月30日 発行 目次

〈特別講演〉

小腸刷子縁酵素をめぐる—腸性アルカリホスファターゼを含めて— .....5

新潟大学 第3内科 朝倉 均 他

〈シンポジウム〉小腸粘膜萎縮の病態とその対策

静脈栄養時の小腸粘膜萎縮に伴う粘液分布形態の変化と腸管透過性の検討 .....15

大阪大学 小児外科 飯干泰彦 他

小腸粘膜の萎縮像と小腸内CCKの遺伝子発現の関連 .....19

久留米大学医学部 第1病理 自見厚郎 他

腸粘膜健康度指標としてのジアミン酸化酵素、臨床応用に際しての問題点、注意点 .....23

大阪大学 第2薬理 今村育男 他

経口PSPを用いる消化管粘膜透過性異常の判定 .....26

徳島大学医学部栄養学科 病態栄養学 中坊幸弘 他

高カロリー輸液、および成分栄養療法における小腸粘膜萎縮の病態とEGFの効果 .....30

滋賀医科大学 第2内科 佐々木雅也 他

核酸成分製剤投与による完全静脈栄養に伴う小腸粘膜萎縮の防止効果 .....35

大阪大学 第2外科 飯島正平 他

TPN施行時のbacterial translocationと腸内細菌叢の変化—Ala-Glnの小腸粘膜萎縮抑制効果— .....39

(株)大塚製薬工場 臨床栄養研究所 松浦寿喜 他

外科侵襲時の小腸粘膜萎縮—その病態と対策 .....43

東京大学 第1外科 齋藤英昭 他

侵襲時の小腸粘膜萎縮とその対策—グルタミンおよび食物繊維の作用について— .....47

帝京大学 救命救急センター 長谷部正晴 他

〈ワークショップ〉消化吸収の諸問題:基礎と臨床における新しい展開

抗癌剤投与下のラット小腸粘膜における各種アミノ酸およびジペプチドの吸収 .....48

彦根市立病院 内科 細田友則 他

成分栄養剤へのグリシルグルタミン添加効果 .....53

徳島大学 病態栄養学 南 久則 他

脂質の消化吸収後における摂食行動の液性調節:アポ蛋白A-IVの関与 .....58

佐賀医科大学 消化器内科 藤本一真 他

消化吸収障害モデルラットの作製と中鎖脂肪(MCT)の有用性の検討 .....62

雪印乳業(株)生物科学研究所 林 直樹 他

腸機能不全患者の糞便中脂質排泄量

— 特に、中性脂肪、中性ステロール、短鎖カルボン酸、胆汁酸について— .....	66
弘前大学 第3内科 工藤研二 他	
アンチセンス法を用いたフルクトース輸送担体遺伝子の同定 .....	70
徳島大学 病態栄養 宮本賢一 他	
葉酸の吸収に関する最近の知見 .....	75
国立病院医療センター 消化器科 正田良介 他	
消化管疾患における消化管内への蛋白漏出と出血の関連について .....	80
東邦大学 第1内科 中谷尚登 他	
実験的潰瘍性大腸炎におけるフラクトオリゴ糖の腸内環境改善作用について .....	84
和歌山県立医科大学 消化器外科 梅本善哉 他	
炎症性腸疾患における糞便中の好中球由来蛋白の検討 .....	88
大阪医科大学 第2内科 齊藤 治 他	
経口胆汁酸負荷試験からみたCrohn病における吸収障害の評価 .....	94
旭川医科大学 第3内科 垂石正樹 他	
クローン病患者の成分栄養の吸収能 .....	98
兵庫医科大学 第4内科 田村和民 他	
〈投稿・原著〉	
胆道閉鎖症に対する抱合型UDCA添加静注用脂肪乳剤経腸投与の効果 .....	103
東北大学 小児外科 安藤 正 他	
〈投稿・症例〉	
腸閉塞として3度開腹されたprogressive systemic sclerosis (PSS)の1例 .....	109
秋田大学 第1内科 鈴木俊夫 他	

## あとがき

今年は、梅雨の明けぬ間にいつやら秋が来た。編集後記も満身に思案がまとまらないうちにいつやら締め切りが来た。締め切りという物理的制約のお蔭げでものにけじめがつく。しかし、ときどき生物学的時間に忠実である余り、物理的時間をその外に置かれ編集部から原稿の催促がいく場合がある。しかし、それも最近は少なくなったようである。これも本誌の地位が向上した一つの証であろう。

雑誌は生き物である。時間と共に成長する。本誌も年々内容が充実し編集部がその内容をさ程心配する事なく事務的に編集作業に移れる様になった。オーケストラの指揮者がその楽団を信用し安心して指揮棒を振っておきさえすれば自ずから名演奏に成ってしまうそれに近い。演奏が終わった後でブラボーの声と拍手のみを一つの事をやり終えた充実感と共に味わえば良いようになって来た。こうなると編集部は益々会誌のために頑張ろうとオートクラインのメカニズムが作動するのも事実のようだ。それも会員の皆様の優れた研究成果がここに反映された結果以外の何物でもない。誠に喜ばしい事である。

本誌の内容は目次に全て要約されており、ここで改めて述べるのは寧ろ竜頭蛇尾であり、また、一編

集委員の及ぶ所ではない。ただ、本誌に限らずどの学会誌をみても何時も思う事は研究には一つのファッションな要素もありそれに乗り遅れるとかなり時代の先端から取り残されるのではないかと心配され、知らず知らずのうちに流行に乗ってしまうことである。研究は時間のフィルターを通して自然淘汰されるであろう。この自然淘汰のなかで生き残り得る研究は必ずしも今よい評価を受けないかもしれないし、in fashionなものでないかも知れない。従って、筆者はここに本会誌の中に多く含まれているに違いない本学会の10年後を規定する優れた研究の数々が更に発展されん事を会員の諸先生と共に念じつつワープロのキイから離れる。

(N・M)